

## 入選

### 小さいようで大きい親切

岐阜県 西中学校 1年 小島 夢葉

私は、5才から9才までの間、アメリカにいました。それは父の仕事の関係で、とても急なできごとでした。

4月1日、私はよくわからずに飛行機に乗り、車に乗り、新しい家に行きました。まだ5才だったので不安などもなく、ただただおもしろいと思い、家の中を走りまわりました。

そして、4月が終わろうとしているころ、ダンボールだらけだった家もだんだん片づき、いよいよ幼稚園に行きました。けれど、母とはなれるとなると不安になったのか、幼稚園の前で泣き出したそうです。それでも、毎日がんばって行きました。

それから1年がたって、自分がしゃべることはできないけれど、相手が何を言っているかはだんだんわかってきました。そして、ついに小学校に上がりました。最初は不安だったけれど、教室に入るととてもにぎやかでした。それでもまだ私は6才です。このころは、日本人が全然いなかったので、しゃべる相手もいません。

私がとても暗い顔をしていると、自分のロッカーのとなりの女の子が私の名前を呼びました。ふり返って見ると、お人形のようにかわいいアメリカ人でした。

「<sup>ゆめは</sup>夢葉、私を覚えている？ 幼稚園、いっしょだったじゃん。」と声をかけてきました。その日から、私は変わりました。

学校に行くのがいやで泣いていると、その子が、

「夢葉、遊ぼ。」

と言い、私は英語だったけれどわかったのか、その子のもとへ行ったそうです。それから、私はたくさんその子とおしゃべりをして、英語が自然としゃべれるようになってきました。そして、その子のお母さんは、私たちが通っていた学校の6年生の先生だったため、いっしょに学校に残って遊んだり、そのままその子の家へ行ってプールに入ったり、泊まったりして、英語が家族のだれよりもしゃべれるようになり、そしてだれよりもアメリカを好きになれました。それに、英語がしゃべれない不安もなくなりました。

彼女はきっと、私と仲良くなって遊びたいという思いだけで、声をかけてくれたり、私の親友になってくれたのだろうけれど、私にとってはそれがとても救いになりました。

そしてその後、たくさんの日本人がアメリカに来ました。私が一人だったときと同じで、きっとみんなも不安だと思い、みんなと仲良くなりました。なぜなら、私みたいにつらい思いをさせたくはなかったからです。でも、そう思うようになれたのもきっと、彼女と、アメリカに来させてくれた父のおかげでしょう。